

研究論文

テネシー・ウィリアムズの『欲望という名の電車』 における談話分析

小 西 弘 信

Discourse Analysis of Tennessee Williams' *A Streetcar Named Desire*

Hironobu Konishi

I

Tennessee Williams (1911–83) の『欲望という名の電車』(*A Streetcar Named Desire*) は、1947年にニューヨークで初演された。この作品で、Williams は、ピューリッツァ賞、ニューヨーク劇批評家賞、ドナルドソン賞の3大賞を同時に獲得するという偉業を成し遂げた。同作品は、彼の代表的戯曲として、さらに歴史的かつ世界的に不朽の名作と見なされた作品であり、様々な解釈を許す奥行き深い作品といえる。

旧南部の貴族的階級の出身でありながら、現在では、無一文になったヒロイン Blanche DuBois と、その妹 Stella Kowalski と、Stella の夫で無教養だが男性としての性的魅力に満ち溢れた Stanley Kowalski との出会いと対立¹⁾、そして Blanche の敗北の後に彼女が精神病院に送られて行く日までの、およそ5ヶ月ばかりの間の悪夢のような日々を描いている。

『欲望という名の電車』(以後、『欲望』と略記)では、全編を通じて真実と虚偽、富裕と貧困、差別と平等、教養と野蛮、生と死など様々な要素²⁾を出しながら、Williams は社会の底辺に根無し草のように生きる人々やはみ出し者を激しくぶつかり合わせるという形を用いて、複雑で、理解しがたい姿で人間を描ききるといえる、人間の概念を押し広げたといえる。

石田章は、Williams の創作に関して、各作品の創作には驚くほど緻密な計算と配慮が随所にほどこされていることを指摘し、『ガラスの動物園』(*The Glass Menagerie*, 1945) の創作を例に挙げて、以下のように述べている。

ウィリアムズがこの戯曲に本格的に取り掛かったのは、『回想録』によると、

『ガラスの動物園』の舞台稽古が始まった直後で、以後約二年間、メキシコ・シティ、ニューオリンズ、キー・ウエストなど転々と場所を移しながら必死にこの作品に取り組んでいる。一見散漫にも見えるこの戯曲に、作者が以下に全精力を注ぎ、推敲の限りを尽くしたかは、例えば現在テキサス大学に残されているこの戯曲の夥しい数の断片的草稿の山をひと目のぞいただけでも容易に想像がつく。この戯曲の一見ルースに見える劇構成は、作者の技量不足からきているものでは決してない。むしろ、練りぬかれた末の、この戯曲の主題を表わすための、意識的ディスコルスなのである³⁾。

このように、Williams は、戯曲の時間の構成、戯曲の中に見られるシンボリズムなどにも、並々ならぬ緻密な工夫を入れる作家なのである。

本研究は、『欲望』を談話レベルにおいて、この劇の構造を示し、Blanche と他の登場人物との会話を分析することにより、Williams が Blanche をどのように描いているかを探るものである。

II

Blanche は、南部での経済的に追いつめられた困窮生活の後に、妹夫婦を頼って、ニューオリンズに向かう。そこで「欲望」と名前の電車に乗って、「墓場」という電車に乗り換えて、6 丁目で降りた所にある「極楽」という地名の場所にたどり着く。妹夫婦の家は、その街路に面した所にある。物語はそこから始まる。

妹夫婦の家に到着した際の Blanche は白ずくめで、白いスーツに、ふさふさした飾りのついたボディスをまとい、真珠のネックレスに、イヤリング、白い手袋に白い帽子を優雅に身に着けている。それは、まるで住宅地の夏のパーティか、カクテルパーティに来たように見える⁴⁾。一方妹夫婦の居住地は、種々雑多な人種が住んでいる、うらぶれた庶民の町である。それらの比較によって、南部のお屋敷育ちがまだ抜け切れない Blanche がその町に不似合であることを開幕早々観客・読者は印象づけられる。

妹の家での Blanche は、最初からそりの合わなかった Stanley と度重なる対立と衝突をしてしまう。その対立と衝突は、両者の性格から来るものであり、また階級の差異から来るものでもあった。途中、Blanche には Stanley の友人である Mitch とのロマンスもあるが、彼女がまっていた様々な虚構や欺瞞は、Stanley の屈辱という行為によってはがし取られ、安楽な余生の約束となる Mitch とのロマンスも、彼との結婚の道も絶たれてしまう。ついに Blanche は Stanley との戦いに敗れ、彼女なりに生きることには失敗し、心身ともに崩壊し、精神病院へ連れていかれるとい

う悲劇的な結末で終わる。

観客・読者にとって、Blanche の印象は「薄幸の美女」として感傷的なものに傾くであろう。それは、南部の裕福な家庭で上品に育った美しい女性が、次々と家族が死んでいくという不幸に見舞われ、財産も失い、その後は自堕落な生活に陥って町から追放され、とうとう妹を頼ってニューオリンズに来たという経緯を Stanley の暴露を通して知ることによって、観客・読者は彼女の薄幸に同情するからである。

ここで、Blanche がどのような女性なのかを他の登場人物との会話から探ってみる。Blanche は、妹との久しぶりの再会には、“Stella, oh, Stella, Stella! Stella for Star!” (I・22)⁵⁾ と歓喜のあまり、狂気じみた叫び声をあげながら、妹に駆け寄る。しかし、その後故郷の屋敷ベルレーヴを捨てなければならなかった経緯を妹に語る際には、再会の時とは全く逆の態度を妹に見せるのである。

Stella. Belle Reve was his headquarters! Honey—that’s how it slipped through my fingers! Which of them left us a fortune? Which of them left a cent of insurance even? Only poor Jessie—one hundred to pay for her coffin. That was all, Stella! And I with my pitiful salary at the school. Yes, accuse me! Sit there and stare at me, thinking I let the place go! I let the place go? Where were *you*! In bed with your—Polack! (I・22)

上記の語りの最後に、Blanche は、ベルレーヴを守る上で、あなたは非協力的だった、と Stella を責めるのである。このように彼女は、妹に対して相反する感情を同時に顕わすという、矛盾した性格を持っている女性だと分かるだろう。

妹以外の他の登場人物たちへの接し方においては、Blanche は育ちが良いと自惚れるがゆえに、一貫して慇懃無礼な言葉で高みからものを言っている。その話し方は、彼らの世界と自分の世界とはまったく違うのだと言わんばかりの差別的な気持ちから来るのである。Stanley との間には、彼が Blanche の性格を見抜いているがゆえに、最初から陰悪なムードが漂っている。自宅で友人と一緒にポーカーゲームに興じる彼を Blanche は慇懃無礼な言葉で軽蔑する。

Blanche: I understand there’s to be a little card party to which we ladies are cordially *not* invited!

Stanley [*ominously*]: Yeah?

[*Blanche throws off her robe and slips into a flowered print dress.*] (II・36)

さらに Blanche の持つ階級意識は、彼女に“lady”と自称させ、場違いな花模様

のプリントドレスを着た格好をさせ、Stanleyの前に立たせるのである。Stanleyがポーランド出身の移民労働者であることから、彼を“Polack”と差別的に呼び、“Well—if you’ll forgive me—he’s *common!*” (IV・82) (「あのね、はっきり言わせてもらえば、あの、下品よ!」)とまで言い放ち、彼の妻になったStellaを非難するのである。ところが、Stanleyの友人の中でも一応紳士的な対応をするMitchには、“[... *Blanche looks after him with a certain interest.*] That one seems—superior to others.” (III・51-52) (「どうやらあのひと、ほかのよりましなようね」)とかなり興味をもって彼を見送りながらも、これも上から目線で彼を品定めするのである。

このように常時Blancheは上流階級としての体面を気丈に保ってはいたが、一人になると、彼女自身の本性を現し始める。実際の彼女は猫の鳴き声におびえ、気を落ち着けるために酒を真っ先に探しに行くといった行動をとる女性なのである。また、彼女は“[faintly to herself] I’ve got to hold of myself!” (I・10) (かすかな声で「しっかりしなくちゃ」)と自分に言い聞かせるように、謎めいた独り言を度々言う女性でもある。

11場では、Stanleyとの戦いにやぶれ、Blancheが精神病院に送られるという悲劇的な場面がついに訪れる。彼女を迎えに来た精神科医と看護師に対して、最初は抵抗するばかりだったが、医師の紳士的な対応には、彼女はそれまでの錯乱した気持ちを抑え、その医師の腕にしっかりとすがり、“Whoever you are—I have always depended on the kindness of strangers.” (XI・178) (「どなたか存じませんが、私はいつも見ず知らずの方のご親切に生きてきましたの」)と言いながら、レディとして最後まで健気に振る舞う姿を見せる。この最終シーンでは、たとえこれから精神病院に収容されることになるにせよ、Blancheに気高さと尊厳が付与されていることで、勝者Stanleyと敗者Blancheとの立場の逆転が起きているといえる⁶⁾。

このようなBlancheは、頼るものすべてを失い、故郷を捨てた一人の女性の哀れな姿であり、元は南部の誇り高き貴婦人だったがゆえに、その姿は、滅びゆく美の最後の輝きであり、形容しがたい悲しみを観客・読者の心に突きつけてくる。この最終シーンに関して、高島邦子は、「ブランチは自分を閉め出す世界に戦いを挑み、悲惨な精神崩壊の果てに敗れ去る。ウィリアムズは、この特異な一人物が引き受ける残酷な負け戦の展開を通して、独特の滅びの美学を打ち立てるのである」と述べている⁷⁾。

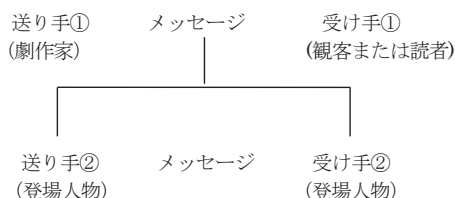
III

ここよりは、『欲望』を談話レベルにおいて、「劇の談話構造」、「劇の会話分析」、「登場人物の会話分析」の点から見てゆく。

(1) 劇の談話構造

『欲望』が劇であることから、その談話分析は劇という点から考えてみなくてはならない。劇は文芸の中でも自然な会話によく似たジャンルである。それは登場人物と登場人物との間の会話からなるからである。しかし、自然な会話とは違って、劇には、登場人物間の会話だけでなく、劇作家と観客・読者との間のコミュニケーションもあることに気づける。その点で、劇の構造は、二重・三重の構造をなすといえる。

橋内武は、その著『ディスコース—談話の織りなす世界』において、「典型的なドラマの談話構造は、少なくとも劇作家—観客・読者のレベルと登場人物—登場人物のレベルの二重構造をなす」と述べている⁸⁾。『欲望』の中でも、この劇の談話構造が、以下のように「劇作家」と「観客または読者」のレベル、「登場人物」と「登場人物」のレベルの二重構造になっている⁹⁾。



橋内は、「このような二重構造により劇的皮肉 (dramatic irony) が醸し出される。つまり、観客には分かっているが登場人物には知らないことになっている状況が作られるのである」¹⁰⁾と追記している。このような二重構造があることで、登場人物の情報と観客・読者の情報において、常に情報の落差が生じ、劇の進行にともなって、観客・読者の側に情報量が増えるにしたがって、観客・読者は登場人物に対して共感または反感を覚えて関わっていくことができるのである。この構造について、仁木久恵も「ドラマを観る、あるいは読む面白さがある」¹¹⁾と述べている。

妹夫婦のもとにやって来た当初の Blanche は気高い様子を見せたが、彼らによって「異物」として追い出されそうになると、怯えている様子を徐々に見せ始める。場面ごとに Blanche のつぶやきは変化してゆくのである。そして劇の二重構造の上位レベルにいる観客・読者は、そうした彼女の独白を耳で聴き、目で見て、各自が彼女に対しての解釈や発見をすることになるのである。

(2) 劇の会話分析

『欲望』が劇のテキストであることから、その会話分析も劇という点から考えてみなくてはならない。劇の会話分析について、マルコム・クルタード (Malcolm

Coulthard) は、『談話分析を学ぶ人のために』(*An Introduction to Discourse Analysis*) において、劇の会話分析について、以下のように述べている。

劇のテキストは、疑似会話を遂行するための台本であり、もともと実際の会話を分析するために開発された技術を使つてうまく接近できるものである。もちろん、われわれは、こういったテキストを芸術上の目的のために作り出された文連続であり、ルールと慣例はさまざまであることを常に想起すべきである。少なくとも登場人物の会話相手の見地からするならば、「あなたの発言には必要とされるだけの情報量を持たせよ。しかし必要以上に情報を与えるものであってはならない」というグライスの質の公準はしばしば破られる。というのは、会話相手は、観客・読者に間接的に知らせるために、双方が知っていることがほとんど確実なことを、たびたび話しかけられるからである¹²⁾。

このように、クルタードは、劇の会話において、そのテキストが疑似会話であっても、会話分析の手法によって分析が可能であることを述べている。そして、その分析において、グライス (H. Paul Grice) が示す「協調の原理」(Cooperative Principle) の「公準」(Maxims) は、「文学テキストの中の登場人物によっていろいろな方法で破られうるし、現に破られている」¹³⁾ とクルタードは述べている。

グライスの「協調の原理」については、『現代英文法辞典』において、「自分の話すことが、発話の時点でその会話の目的・方向によって求められているようなものであるようにすること」¹⁴⁾ と定義されている。さらに、この原理は、量、質、関連性、作法の4つの公準に分けられる。すなわち、次の①から④で説明される。①量の公準 (The maxim of Quantity) は、話し手は会話のやりとりで当面の目的にかなう必要とされる十分な情報を適切な量で与えること。②質の公準 (The maxim of Quality) は、話し手は偽と信じていることや十分証拠のないことを言わないこと。③関連性の公準 (The maxim of Relation) は、話し手は話題に関連性のある事だけ言うこと。④作法の公準 (The maxim of Manner) は、話し手ははっきりと分かりやすい方法で言うこと¹⁵⁾。

ここからは、クルタードが談話分析で示した「協調の原理」に関連して、『欲望』において Blanche と他の登場人物たちとの会話を見てゆく。それらを分析しながら、上記のグライスが示す「質の公準」などの公準が破られることによって、どのような効果が現れているのかを探ってみる。

オールドミスになった女性にとっての過酷な現実を自覚している Blanche は、自分の心の弱さとともに、妹夫婦の厄介者にならないためにも、Stella に結婚して身を落ちつける考えがあり、自分が目を付けた結婚の相手は、Stanley の友人 Mitch

であると告げる。彼女が Mitch に決めたのは、彼が Stanley の友人の中でも一番紳士的な振る舞いのできる男であると評価したからである。以下は Stella に Mitch の話をする場面である。

Blanche: ... What I mean is—he thinks I’m sort of –prim and proper, you know!

[*She laughs out sharply*] I want to *deceive* him enough to make him—want me...

Stella: Blanche, do you want *him*?

Blanche: I want to *rest!* I want to breathe quietly again! Yes—I *want* Mitch ... *very badly!* (V・95)

上記の会話において、Blanche は Stella に話す際に、文末を言い切らない形をとることで、「量の公準」を破っていることに気づける。それによって、Blanche は、相手に言葉を受け継がせて、次の発言権を与えるようなふりをして、実は相手の発言を自分に合わせるよう仕向けているのである。また Stella の “Blanche, do you want *him*?” という問いに、Blanche が “I want to *rest!*” と答え、それを “I *want* Mitch ...” と修復 (repair) することで、Stella の発言に合わせているのである。

そして、Blanche は、Mitch と二人きりになった時には、衣装に関しても努めて紳士的に見せようとする彼を賞賛することで、良い印象を与えようとしている。

Mitch: I don’t like to wear a wash-coat even in summer because I sweat through it.

Blanche: Oh.

Mitch: And it don’t look neat on me. A man with a heavy build has got to be careful of what he puts on him so he don’t look too clumsy.

Blanche: You are not too heavy.

Mitch: You don’t think I am?

Blanche: You are not the delicate type. You have a massive bone-structure and a very imposing physique.

Mitch: Thank you. Last Christmas I was given a membership to the New Orleans Athletic Club.

Blanche: Oh, good. (VI・105-06)

このように Blanche に誘惑された Mitch は彼女お得意のコケットリーとフラテーションに乗せられてしまい、彼女をお堅い上品な女性だと見なし好意を抱いてしまう。彼は “I like you to be exactly the way that you are, because in all my—experience—I have never known anyone like you.” (VI・103) (「あなたはいまのままでいてくだ

さい、これまでの俺の—経験の中に—あなたのような人はいませんでした、一人も」
 と言ってしまうのである。コケットリーとフラテーションによる Blanche の Mitch
 誘惑は演技力によって成功するのである。そして Blanche のコケットリーとフラテー
 ションこそ、彼女の本音とは違う嘘であり、「質の公準」を破ったものである。

Blanche によって故郷の屋敷を失ったことを Stella から聞いた Stanley は、Blanche
 が遺産を独り占めにしたのではないかと疑い、彼女を詰問する。彼女はわざとらし
 く彼を賞賛するような言葉をならべて彼に応戦する。

Blanche: I cannot imagine any witch of a woman casting a spell over you.

Stanley: That's—right.

Blanche: You're simple, straightforward and honest, a little bit on the primitive
 side I should think. To interest you a woman would have to—[*She pauses with
 an indefinite gesture.*]

Stanley [*slowly*]: Lay ... her cards on the table.

Blanche [*smiling*]: Well, I never cared for wishy-washy people. That was why,
 when you walked in here last night, I said to myself—"My sister has married a
 man!"—Of course that was all that I could tell about you.

Stanley [*booming*]: Now let's cut the re-bop!

Blanche [*pressing hands to her ears*]: Ouuuuu! (II・39-40)

ここでも彼女は陽気な表情でコケットリーとフラテーションを使って、Stanley
 の脅しをかわそうとする。しかし、彼は彼女のそうした言葉つかいに嫌悪し、怒り
 を爆発させ、わめいてしまう。すると彼女は驚き、即座に退散しようとする。彼に
 は彼女のコケットリーもフラテーションも通用しない、というのは、彼は直感的に
 彼女の言動が嘘であることを見抜いていたからである。最後に彼女が両手を耳に当
 てて“Ouuuuu!”（「ああああ！」）と叫んで退散する姿には、観客・読者は失笑する
 であろう。

Blanche が、コケットリーとフラテーションを度々使う理由は、それらが彼女の
 生き抜くための手段だったからではないだろうか。7 場において Blanche の誕生祝
 が行われる前に Stanley と Stella が Blanche の嘘に関して口論している最中、彼女は
 風呂の中で「ペーパー・ムーン」（“Paper Moon”）の歌詞にある“*But it wouldn't
 be make-believe If you believed in me!*”（VII・120）（「嘘もまことになるのよ、ただ
 私を信じたら」）と繰り返して陽気に歌うのである。この歌詞に関して、高島は「ま
 るでこの世の中に魔法の力が存在するかのよう歌い、念ずるのである。ブランチ
 が最後に自分を賭けたのは、嘘をまことに変える術である」¹⁶⁾と述べている。まさ

にコケットリーとフラテーションこそ、その術であらう。

Stanley が Blanche の過去を暴く場面で、彼女が男との情事の際に利用したホテルの名前を彼は彼女に告げる。以下の引用場面のト書き¹⁷⁾に“[*Blanche laughs breathlessly*]”（「息苦しく笑う」）とあるように、Blanche は焦りながらも何とか陽気にふるまい、話題を当該のホテルから、上流階級なら常識として持っている香水の話題へと上手く転換させるという手段を講じている。このように話題転換することによって、Blanche は何とか言い逃れ、一応はこの場を取り繕うのである。この話題転換は、「関連性の公準」を破っていることになる。

Stanley: Well, this somebody named Shaw is under the impression he met you in Laurel, but I figure he must have got you mixed up with some other party because this other party is someone he met at a hotel called the Flamingo.
[*Blanche laughs breathlessly as she touches the cologne-dampened handkerchief to her temples.*]

Blanche: I'm afraid he does have me mixed up with this "other part." The Hotel Flamingo is not the sort of establishment I would dare to be seen in!

Stanley: You know of it?

Blanche: Yes, I've seen it and smelled it.

Stanley: You must've got pretty close if you could smell it.

Blanche: The odor of cheap perfume is penetrating.

Stanley: That stuff you use is expensive?

Blanche: Twenty-five dollars an ounce! I'm nearly out. That's just a hint if you want to remember my birthday! [*She speaks lightly but her voice has a tone of fear.*] (V・89-90)

Stanley の気をそらせることに成功した Blanche だが、ト書きには、“[*She speaks lightly but her voice has a tone of fear.*]”（「気軽な口調で言うが、声に不安の響きがある」）とあるように、やはり必死になって事実を隠そうとしていることが分かる。彼女のそうした態度に関して、清田幾生は「その表面上の陽気さの背後には、彼女の何か絶望的な必死さがある。減びてしまった南部の旧い文化がまるで通用しない粗野な世界で、ブランチは追いつめられていくのである」と述べている¹⁸⁾。

劇の中で、嘘が明らかにされるにつれて、Blanche のイメージは変わり、新たな性格づけがなされているのである。それは、レディから pathological liar（病的虚言者）¹⁹⁾へと哀れにも引き落とされることでもある。このように Blanche に協調の原理の公準を破らせることで、Williams は、彼女の性格描写を上手く創作し、観客・

読者を惹きつけているといえよう。

(3) 登場人物の談話分析

ここからは、会話という談話レベルにおいて、語句や文がどのように使われているのかを通して、Blanche と他の登場人物との会話に焦点を当て、彼女の台詞によく現れる「くりかえし」「照応」「隣接対」「省略」の点から具体的に見てゆく。

①くりかえし

「くりかえし」は、文や談話の中で既に述べられたことをまた再び述べることをいう²⁰⁾。「くりかえし」の対象になるのは、語であったり、文の一部であったり、文全体であったりする。

Stanley が Stella に Blanche の過去を明かした後 Blanche の誕生日のディナーは、陰湿な雰囲気がかかっていた。Stanley は手づかみでがつがつと料理に食らいついている。Blanche が場を和ませようとジョークを披露するが雰囲気はより悪くなるだけである。

Blanche: Apparently Mr. Kowalski was not amused.

Stella: Mr. Kowalski is too busy making a pig of himself to think of anything else!

Stanley: That's right, baby. (VIII・131)

Blanche と Stella は、彼を“Stanley”ではなく、“Mr. Kowalski”と敬称で呼んでいる。その呼び名の繰り返しに、Stanley の下品な食べ方に対して姉妹が彼を軽蔑する気持ちが出ている。まるでお嬢様育ちの二人と移民労働者の Stanley とが階級間で争っているように感じられる。

②照応

英語の情報では、旧情報と新情報がある。新情報とは書き手（話し手）が読み手（聞き手）に初めて伝える情報である。一方、旧情報とはこの両者が共有している情報であり、つまり何を、また誰を指しているかが互いに分かっている情報である。また、新情報と旧情報は常に共存していることが普通であり、それらの情報を結び付ける、つまり結束させているのはたらしを担うものがある。それが「照応」である²¹⁾。

Blanche は Mitch との結婚の可能性がないことが分かってくると、会話の途中から精神錯乱の状態に陥る。それは幻聴として、ボルカが彼女の意識の中で流れ始めるのである。

Blanche: ... I'll just—[*She touches her forehead vaguely. The polka tune starts up again.*—]pretend I don't notice anything different about you! That—music again...

Mitch: What music?

Blanche: The “Varsouviana”! The polka tune they were playing when Allan—Wait! [*A distant revolver shot is heard. Blanche seems relieved.*] There now, the shot! It always stops after that. [*The polka music dies out again.*] Yes, now it's stopped.
(IX・141)

Blanche に “That—music” と言われて、Mitch も “What music?” と不安げに聞き返してしまう。彼には「あの曲」が「どの曲」を指しているのかが不明なのである。Blanche の不可解なつぶやきに、Mitch は、ついに “Are you boxed out of your mind?” (IX・141) (「頭がどうかしたんじゃないのか」) と言ってしまふ。指示詞 “That” が何を照応しているかが不明なことによって、Blanche が非現実の世界に移行しているような感じを与える。

③隣接対

通常の会話は隣接対の単位で構成される。隣接対は通常、二人が交代で一回ずつ話することができる。例えば質問と応答の隣接対では、前半が質問、後半が応答となる。しかもそこに丁寧さの原則が働いて、会話の従事者はできるだけ社会慣習的に望ましい応答をすることが期待される。話しことばの談話における論理の展開やテーマの流れを理解することに関して非常に特徴的な要素は、話しことばにおける隣接対による結束性である²²⁾。

Blanche が Stella の家に初めて訪れた際に、同じ家の 2 階に住んでいる Eunice が登場し、まず応対する。Eunice は、親しげに、Blanche にあれこれ質問している。「問いかけ」と「答え」の隣接対である。

Eunice: ... So you're Stella's sister?

Blanche: Yes. [*Wanting to get rid of her*] Thanks for letting me in.

Eunice: *Por nada*, as the Mexicans say, *por nada!* Stella spoke of you.

Blanche: Yes?

Eunice: I think she said you taught school.

Blanche: Yes.

Eunice: And you're from Mississippi, huh?

Blanche: Yes.

Eunice: She showed me a picture of your home-place, the plantation.

Blanche: Belle Reve?

Eunice: A great big place with white columns.

Blanche: Yes ... (I・8-9)

Blanche の返事は、“Yes” のみであり、とりつくしまもないといった印象を与え、彼女が Eunice との関わりを早く終了させたい気持ちが表れている。この場面について、仁木は「展開性のないこの会話を見ると、初対面にせよ、心をなかなか開こうとしない Blanche の様子をうかがい知ることができる」²³⁾ と述べ、彼女に自閉的な傾向があることを注目している。

Mitch は Blanche とデートした後、彼は彼女を家まで送る。家での Blanche は彼との会話の途中から、彼よりも優位になり、彼を命令し始める。彼も命じられたままに従ってしまう。二人の会話は「命令」と「服従」の隣接対になっている。

[*She enters the bedroom with the drinks and the candle.*]

Blanche: Sit down! Why don't you take off your coat and loosen your collar?

Mitch: I better leave it on.

Blanche: No. I want you to be comfortable. (VI・104-05)

この会話の後から、Blanche は彼に対して何かお願いする際に、“Why don't you ...?” や “I want you....” のように、カジュアルな表現しか選択していない。この隣接対によって、Blanche が Mitch を誘惑することに既に成功し、優位な気分になっていることが分かる。

④省略

省略とは、通例文法的には必要なのだが、書き手（話し手）が脈絡から明らかなので取り上げる必要がないと想定した要素を省くことをいう²⁴⁾。

Blanche が Stella に故郷の屋敷を失ったことを打ち明ける場面である。そのことは、Stella に早く知らせて納得させることではあったが、彼女の非難を予想できるゆえに、Blanche は、なかなか言い出せないでいる。

Blanche]: I knew you would, Stella. I knew you would take this attitude about it!

Stella: About—what?—please!

Blanche [*slowly*]: The loss—the loss...

Stella: Belle Reve Lost, is it? No!

Blanche: Yes, Stella. (I・20-21)

Blanche がゆっくりとした口調で“The loss—”と後続の言葉を省略することで、二人の間に生じる緊迫感が効果的に現われている。省略が効果的に使用されているといえよう。

仲間を集めてポーカーゲームをしている Stanley が、そのことで愚痴をこぼす Stella に怒ってしまい、彼女は家を飛び出してしまう。以下はその後 Stanley を Blanche と Mitch が非難している場面である。

Blanche: I'm not used to such—

Mitch: Naw, it's a shame this had to happen when you just got here. But don't take it serious.

Blanche: Violence! Is so—

Mitch: Set down on the steps and have cigarette with me. (III・68)

ここで Blanche は、“such—”や“so—”のように後続の言葉を省略している。これは、レディが全てを語ることは、はしたないからであろう。彼女が淑女ぶったふるまいをするために故意に行った省略といえる。彼女のこうした話し方は、Mitch に良い印象を与え、彼とのロマンスを生み出すための布石となっているのである。

IV

本研究では、『欲望』を談話レベルにおいて、「劇の談話構造」、「劇の会話分析」、「登場人物の会話分析」の点から見てきた。「劇の談話構造」では、劇を軸にして、一つは劇中の登場人物間のレベルのコミュニケーションとその上位にある劇作家と観客・読者間のレベルのコミュニケーションという二つのレベルの構造があることを述べた。「劇の会話分析」と「登場人物の会話分析」においては、Blanche を軸に他の登場人物との会話における談話的特徴を述べた。

Blanche と他の登場人物との会話を見ていくと、『欲望』の開幕早々から、彼女は他の登場人物たちと戦っているように見える。その形勢は、彼女の過去の経歴が少しずつ明らかにされるにつれて、彼女の敗北が確実になってゆくのである。その敗北への道について、高島は「ウィリアムズは、この特異な一人物が引き受ける残酷な負け戦の展開を通して、独特の滅びの美学を打ち立てるのである」²⁵⁾と述べている。

その「独特の滅びの美学」は、かつての権力者であった南部農園者の末裔と、新

しい時代における新たな労働力として抬頭してきた新勢力の移民とを戦わせ、Blanche をして、かつて栄光に浴していた者が、敗者として、残酷な世界の中でいかに壮麗に倒れ得るかという、独特の滅びの美学といえよう。また、その美学を見事に体現したという点で、Blanche というヒロインは、Williams が「自らのリアリティにそって自分に忠実に生きるべく、既存の社会体制から逸脱して、ボヘミアンとして生きる人々の姿を描き続けた」²⁶⁾ という創作の過程において生み出された登場人物の中でも、秀逸のヒロインともいえよう。

Blanche が他の登場人物との戦いに使った戦術は、主にコケットリーとフラレーションだった。しかし、彼女は、それらを駆使しても彼らとの戦いに敗れるのである。7場で Stanley は Stella に“All this squeamishness she puts on!” (VII・119) (「あの見かけだおしの潔癖さ」) と言い、Blanche の本性は見抜かれているのである。そして、彼らとの戦いに負けた代償として、Blanche は徐々に精神的に破綻し、ついには精神病院へと送られ、狂気と幻想の世界に生きるしかなくなるのである。

Blanche の戦い方は、あたかも敵陣の戦場に、生きる上で本来は後ろ盾となる故郷南部の広大な土地や屋敷という可視化できる確かな武器ではなく、唯一残されたコケットリーやフラレーションのような嘘をまことに変える術という可視化できない武器でのみ、たった一人で向かっていく不運な戦士の戦い方のようなのである。そして、彼女のコケットリーやフラレーションこそ、彼女が過酷な現実に対処し生き残るための手段であり、そこには捨てきれない南部で育った虚栄心が付きまとっているのである。彼女が、戦いの最中に見せる「優美と狂暴」の姿は、滅びゆく美の最後の輝きであり、この劇でしか味わえない深い悲しみを観客・読者の心に突きつける。そして観劇・読後には何とも言えない判官びいきのような同情心を観客・読者は彼女に抱いてしまうだろう。

『欲望』において、悲劇的な雰囲気徐徐に作り出しながら、没落したが誇り高き南部貴婦人 Blanche の破滅に至るまでを見事に描き切れたのは、Williams の劇作術の腕の冴という他はないといえよう。

注

- 1) 松岡綾子, 「A Streetcar Named Desire における叙情詩的解釈」『英語英米文学論集』第11号, 2002, p. 43。
- 2) 石田章は, 「ウィリアムズの作品には, 例えば, 粗暴と繊細, 醜と美, 強靱と脆弱, 光と影, 正気と狂気, 生と死—といったような, 相反し対立する要素が, あたかも一つの面の表裏のように同時存在している場合が極めて多い」と指摘している。(石田章, 「テネシー・ウィリアムズ」『アメリカ文学の新展開—第二次世界大戦後の詩・劇・批評等—』尾形敏彦編, 山口書店, 1984, p. 159)。

- 3) 石田, p. 165。
- 4) Blanche の装束の白のイメージは, Eunice の “A great big place with white columns.” (I・9) (「すごく大きいとこだね, 白い円柱が何本もあって」) という台詞にも呼応する。
- 5) 引用したテキストは次の版であり, 引用に付記する () の数字は, そのテキストの場とページ番号を表す。Tennessee Williams, *A Streetcar Named Desire*. (New York: New Directions Publishing Corporation, 1980)
- 6) 一之瀬和夫, 「主体をめぐる演劇—テネシー・ウィリアムズ再考」『越境を超えるアメリカ文学』, ミネルヴァ書房, 2001, p. 226。
- 7) 高島邦子, 『20世紀アメリカ演劇—アメリカ神話の解剖—』, 国書刊行会, 1993, p. 54。
- 8) 橋内武, 『ディスコース—談話の織りなす世界』, くろしお出版, 1999, p. 185。
- 9) 「劇の談話構造」は, その図表を, 橋内 (1999, p. 185) の「3. ドラマの談話構造」を参考に作成した。
- 10) 橋内, p. 185。
- 11) 仁木久恵, 「『欲望という名の電車』—ブランチのコミュニケーション行動」『明海大学外国語学部論集』第7集, 1994, p. 77。
- 12) マルコム・クルタード (吉村昭市他訳), 『談話分析を学ぶ人のために』, 世界思想社, 1997, p. 287。
- 13) クルタード, p. 285。
- 14) 荒木一雄・安井稔, 『現代英文法辞典』, 三省堂, 1992, p. 349。
- 15) 「協調の原理」の4つの公準に関しては, 橋内 (pp. 77-78) を参考にした。ただし, 橋内は「公準」を「公理」と訳している。
- 16) 高島, p. 67。
- 17) ト書きには役者に非言語行動を促す役割がある。仁木は「ドラマコミュニケーションでは, ことば(せりふ)ばかりでなく, 舞台の上での非言語行動も大きな役割を果たす」と述べている。(仁木, pp. 70-71)
- 18) 清田幾生, 「戯曲の作法—『欲望という名の電車』の場合—」『長崎大学教養部紀要(人文科学篇)』第38巻, 第1号, 1997, p. 159。
- 19) 岡田春馬は, その著『テネシー・ウィリアムズ作品にみる幻想と現実』で, 「Blanche をして “pathological liar” ならしめたのは, 過去の悲惨な現実認識からの逃避によるのである」と述べている。(岡田春馬, 『テネシー・ウィリアムズ作品にみる幻想と現実』, 八潮出版, 1983, p. 18)
- 20) 佐久間まゆみ, 『文章・談話のしくみ』, おうふう, 1997, p. 38。
- 21) 四宮満, 『英語の発想と表現』, 丸善株式会社, 1999, p. 100。

- 22) 河内清志, 「ディスコースの形式とその理解」『英語英米文学研究』第11号, 2003, p. 67。
- 23) 仁木, p. 72。
- 24) マイケル・マッカーシー (安藤貞雄・加藤克美訳), 『語学教師のための談話分析』, 大修館書店, 1995, p. 57。
- 25) 高島, p. 54。
- 26) 石塚浩司, 「VI アメリカの演劇 2」『講座 英米文学史 劇 III』小津次郎編, 第7巻, 大修館書店, 1992, pp. 305-06。